

れは、それより前に発表された二つの論文、「犯罪者と社会の心理学」(一九三二)と「キリストの教義の発達」(一九三〇)の成果を凝縮させたものと考えることができる。この後者の論文は、一九三二年に分冊本としても出版されているが、フランク・ボルケナウはこれを、「マルクス主義とフロイト派精神分析の偉大な結合」と評している。しかし、ホルクハイマー編の機関誌に掲載されたこの一九三三年の論文は、ただ単にフロムの初期の著作の仕上げとなるだけではなかった。この論文は、事実上、後の数十年におけるフロムの著作の方法論的前提の全てを含んでいる。簡潔で、ところによっては圧縮されすぎてさえいるが、この論文——九年後に書かれた一般に最初の基礎的著作と考えられている『自由からの逃走』ではない——はフロム自身の学問的アプローチにおけるもつとも決定的な躍進を含んでいる。これについてはいくらか詳細に議論する必要がある。

フロムは、人間の動因についてのフロイトの定義と、社会・経済的条件についてのマルクスの分析とから出発して、新しい社会心理学に関する自分自身の定義に到達する。この学問がおもに目指すべきは、「集団」「階級」の本能的構造を、つまり、リビドーに導かれ大部分が意識下にある行動を、その社会・経済的構造を文脈として「洞察することである。精神分析は、「史的唯物論の考えにまったく新しい次元を加えることができる。すなわち、社会のもつとも本質的な構成要素のひとつ、つまり人間性そのもの、より深い理解である」。

フロムは続けて、弁証法的唯物論の諸理論は物質的条件が人間の意識におよぼす影響を把握し損ねている、と論じている。精神分析が重要になるのはここである。

精神分析だけが、イデオロギーは一定の欲望や動因や関心や欲求の産物であるということを示すこと

ができる。それらは、大部分が意識的には自覚されず、イデオロギーを通してはじめて外的に表現される。これらの本能は、一方でそれら自体が生物学的動因の所産だが、他方でまた、その量も中味も個人と彼が属する階級の社会・経済的条件によって形成される。

精神分析の方法を用いることによって、イデオロギーと観念をそれらのリビドー特性から分析することができ、というのがフロムの結論である。ここから、社会・経済的条件が社会全体およびその個々の成員の精神的情動的発達に及ぼす影響についてさまざまな結論が導き出されるだろう。そうすることによって、「社会過程のダイナミックな構成要素」の研究者は、過去の歴史を逆上することもできれば、未来を予測することもできるだろう。フロムはまた、支配的特権階級と、支配され特権を持たない大衆とのリビドー関係、つまり、搾取的資本主義がさしたる困難もなく現状維持ができている現象にも言及している。

ここでは、この注目すべき論文について簡単な説明しかできないが、この論文が、フロムの方法論の輪郭を著実に明らかにし、彼の後の仕事が大筋を浮き彫りにしていることは明らかである。加えてそれは、フロムが自分の思想をさらにいっそう発展させるための示唆と共感とを、研究所の環境からとりわけホルクハイマーの導きからえたという事実について、明瞭な証しとなっている。きわめて注目すべきことに、フロム自身が、研究所を離れた後、この事実を公式に認めることはけっしてなかった。また、フロムの思想が研究所の他のメンバーに与えた影響について当然示されるべき評価も、その後なされていない。

後のもつと有名な著作をよりよく理解するためには、一九三〇年代の一連の独創性に富んだ論文群を

Propriety of the Erich Fromm Document Center. For personal use only. Citation or publication of material prohibited without express written permission of the copyright holder.
Eigentum des Erich Fromm Dokumentationszentrums. Nutzung nur für persönliche Zwecke.
Veröffentlichungen - auch von Teilen - bedürfen der schriftlichen Erlaubnis des Rechteinhabers.



ひとわたり当たっておくことが不可欠である。これらは、『社会研究誌』に次々と掲載されている。特徴的なことに、これらの論文は、後の本と同じく、三つの別個の、しかし密接に関連したカテゴリーに分けることができる。最初の研究群は、個人的性格と社会的性格との相互依存性を解きあかそうとするものである。フロムは「分析的心理学の方法と課題」と同時に、一九三二年の『社会研究誌』の同じ創刊号に「精神分析的心理学とその社会心理学的意義」を発表した。彼はこのなかで、フロイトのリビドー論に対して、僅かな、しかし顕著な修正を加え、単に個人の発達だけがリビドー動因によって規定されているのではなく、実際にはすべての社会構造もまた「集合的リビドー」とでも呼びうるものによって等しく支配されていると、主張している。フロムの「社会的性格」論は、試験的でこそあれ、明らかにそれとわかる形で、すでにこの論文に現れているのである。フロイトの性格の定義によれば、一定の組織や、国家や、共通のイデオロギー構造によってまとまっている社会集合体もつ「社会的性格」は、ダイナミックで変化の予測がつかないものであると見られなければならない。フロムによると、資本主義社会の「社会的性格」は、

特定の社会に住むすべての人々に典型的な性格特性の総和と考えられねばならない。しかし、本質的な側面は、このような性格特性の原因となっているリビドー刺激、つまり、性格全体のダイナミックな機能にこそある。

ここから、フロムは資本主義システムに典型的な「リビドー構造」の短いが説得力のある描写をしている。後に「社会的性格」と呼ばれるものについては、本書の後の方でフロムの大衆向け著作、とりわ

け『生きるということ』について論じるところで分析する予定である。

このふたつの論文の後、フロムは、二番目の研究群である、これらに劣らず革新的なふたつの論文において、母権制の問題を論じている。一九三四年、フロムは、ヨハン・ヤーコップ・バッハオーフェンの画期的な書、『母権』（一八六一）に触発されて、「母権制理論の社会心理学的意義」に着手する。この研究は、近代人にとっての神話の重要性を強調するものである。それは、この問題のもろもろの歴史的局ををざっとたどった後、フリードリッヒ・エンゲルスの検討に向かう。エンゲルスは一九世紀階級社会の父権制ヒエラルヒーをバッハオーフェンの理論を援用して独自な形で批判しているのだ。この論文で論じられているのは、明らかに、近代産業国家に典型的な「父権中心」社会である。後にフロムは、こうした見方を彼自身の手広い社会批判に組み込んでいくことになる。また、これほど大きくはないが、似たような重要性をもつ初期の書評論文がある。『社会研究誌』の第二巻（一九三三）に紹介された、ロバート・プリフォールの三巻からなる母権制研究についてのもので、原書は英語で一九二八年に出版されている。プリフォールはダーウィーンとフロイトから強い影響を受けているが、その思考は人類学的、民族学的色合いが強すぎて、フロムが取り上げ、心服しているほど信憑性はない。フロムの批判は、彼自身の社会心理学的立場についてきわめて示唆的である。

このおそろしく生産的な時期にエーリッヒ・フロムが著した、三番目の、そして最後の研究群は、特徴的にも一九三〇年代当時の社会の、より実践的な局面に向けられたものである。フロムは、分析的心理学の診療に及ぼす社会の影響についての研究のなかで、「精神分析理論の社会的制約」(一九三五)、フロイト派精神分析に対して初めて明確に批判的な態度を見せている。性道德に対するフロイトの評価は、今では、彼自身の背景、つまり一九世紀末の支配的ブルジョワジーの禁欲的な社会慣行と思考の直



接の反映であると思われる。フロムは、フロイトの権威主義的で階級的限界性を帯びた視点に代わるものとして、ゲオルク・グロデックとシャーンドル・フェレンチの活動を挙げている。両者とも、分析者と被分析者との間に自由で開かれた関係を説いていたのである。するとフロイトの患者に対する「寛容さ」は、無頓着以外の何物でもない。それどころか、寛大と見せかけてはいるものの、本質的には父権中心的で抑制的な社会的性格の産物に見える。結論として、フロムはフロイト派の分析の修正を推奨し、これが「患者が幸福を求め、あらゆるタブーや抽象性から評価を排除することを求めることを、無条件に受け入れる独立の哲学」と結び付けられる必要性を強調した。このフロイト主義に対する修正的——もしくは「修正主義者」の——姿勢は、後のフロム自身の精神分析家としての活動の確固たる基礎となるものだった。そしてこの姿勢のために、フロムは合衆国への亡命の後、より正統主義的なフロイト派の専門家たちと対立することになる(その経緯については以下で触れる)。フロムのフロイト批判は、さらに『ジクムント・フロイトの使命』(一九五九)や『フロイト思想の偉大さと限界』(一九七九)で詳らかにされている。

この研究群には他に三つの研究が含まれるが、それらはワイマール時代のブルジョワ(すなわち資本家)社会の社会的性格の探究を目指すものだった。フロムは、論文集『権威と家族の研究』(一九七九)に注目すべき一章を寄稿している。この本は、概して抑圧的で父権的な社会構造を反映した家族という文脈における、権威主義のもろもろの社会心理学的側面を扱ったものである。フロムが書いた論文は、研究所のさまざまなメンバーによるこの共同研究のなかでも、より優れた成果のひとつである。同時にフロムはもうひとつ独創性に富んだ論文「無力の感情」(一九三七)を著し、これもまた『社会研究誌』に掲載されている。これは『社会研究誌』に掲載されたフロムの主要な論文の最後のものとなった。結

局のところ、ホルクハイマーの編集によってパリのリブレリ・フェリックス・アルカンからすでに五巻目を刊行していたこの研究所機関誌には、エーリッヒ・フロムによる基本的な論文は全部で五本ある(プリフォールトについての書評論文は含めない)。そしてこれらが、フロムの社会心理学者としての成長の一里塚となったのである。この他にも、同じくこの機関誌にはおよそ三〇近い彼の書評が掲載されている。これらの書評は、少なくとも部分的には、この時代に彼がさまざまな哲学や心理学や社会学の理論を受容していく過程を表している。

論文「無力の感情」は、フロムの後の業績を理解するためには、とくに重要である。後のフロムの、より影響力の大きい本の礎石の大部分は、個人とブルジョワジーの本質的特性に関するこの優れた二三ページの論文の限られた射程のなかに収まってしまふ。ブルジョワの性格——それは後に「自由からの逃走」で、さらには、『正義の社会』(一九五五)、『人間は克服するか?』(一九六一)(邦訳『人間の勝利を求めて』、『人間の心』(一九六四)(邦訳『悪について』)といった五〇年代から六〇年代にかけての政治的指向性をもった本において、より深く掘り下げられている——は、明らかにアンビヴァレントなものと思なされる。一方でそれは、活動的で創造的な構成要素を備えており、個々の人に(結果的に社会全体に)すべての生活機能を理性的に整えさせる。それゆえ、ブルジョワ階級は、過去のどの時代よりも多くの人びとのために社会・経済的变化を実現する手段となってきた。しかし他方で、ブルジョワ階級とその成員の特徴であるこのように創造的で形成的な動因の対極には、諦観や無気力や盲従に向かう、同じように強い傾向もある。そして、この後者の性格特性こそが——フロムはこれを正しくも神経症的資質と見なしている——個人をその社会的環境のなかで救いようのない状態におとしめてしまふものなのである。

彼「すなわち、ブルジョワ個人」自身の手になる仕事は、もともとは彼のためになり、彼を幸福にするはずのものだったが、いまや疎遠な世界となり、彼はこれに卑しく無気力に服従している。彼はこれとまったく同じ「盲従の」態度を、社会的政治的機構の全体に向けている。

政治権力、すなわち「国家」に対するこの神経症的な無力感、過去において、たとえ破局的戦争の切迫が十分認識されたときでさえ、常に大衆の集合行動を妨げてきた。歴史上、さまざまな危機や破滅的進展の回避はたいへいの場合でできなかったが、それもこれと同じどうしようもない情性のためである。しかし、根深い無力感に単に「より大きな」社会的相互行為に限られるものではない。ブルジョワ個人は、概してその対人関係においても、さまざまな事物や対象に対しても、同様の無力さを感じている。いや、自分自身そのものが、創造的な内省では変わらない、変えることのできない実在であるように思えてしまう。フロムによれば、この神経症的自己限定の「はけ口」としてもっとも広くみられるのが激怒である。しかしこの感情がまた、大部分のように流れていくかはわからない。その源も原因もその個人にはわからない。その結果、怒りはしばしば最終的には恐怖となる。これは、権威主義的パーソナリティの主要な特徴のひとつである。

このような過程の原因には、ふたつの段階があるようだ。無力感の初期のあらわれは、父権的／権威主義的な育児を通して、青年期のパーソナリティに見いだされる。サド・マゾヒズムの性格特性はしばしば権威主義的家族に見られるものだし、これが青年各自の成人後の生活に長く影響を与えることになりがちである。(これはみな、フロムが『破壊』(邦訳)で掘り下げて論じていることである。)第二に、

服従と諦観へのこの「私的」な家族内訓練は、さらにまた、おそらくは不可侵で不可解な、個人の理解などまったく及ばないかに見える経済システムによって補強されている。

ブルジョワ個人が彼自身の行為の背後にある心理的理由を知っていないという事実は、彼が経済的因果関係とこの因果関係に則った市場の命令とについての知識をまったく欠いていることに対応している。彼はむしろ、これらを運命的な理解不可能な行為とみなしているのである。

受動性と社会的無気力に向かう、ブルジョワジの私的な、また集合的な自己縮小は、最終的には停滞した「社会的」性格を生み出す。圧倒的な依存感が、個人にも全体にも浸透する。フロムが、この状況はまさに権威主義的イデオロギーの肥沃な土壌だ、と結論づけたのも驚くにはあたらない。すべての希望は、集合的にも個人的にも「変化」への曖昧だが強烈な期待——あらゆるものを犠牲に何らかの變化を——に、そして、「国家の運命」という名のもとでの独裁者パーソナリティの台頭の可能性に集中する。まったく明らかなことだが、この論文はただ単にヨーロッパ・ファシズムと国家社会主義を成立させた前提条件を正確かつ洞察豊かに叙述しただけのものではない。この論文はまた、停滞によって支配され、進化を受け付けなくなっている社会形態に固有な危険性を、正確に指摘してもいるのである。フロムは後にこれとまったく同じモデルを、アメリカ独占資本主義についてのさまざまな分析に適用することになる。

無力についての論文にはまた、後にフロムが資本主義社会の「社会的性格」と呼んだ現象の本質的要素のすべてがあげられている。「自由からの逃走」はもとより、これに続く多くの著作が、この現象の探



究に当てられることになる。さらにまた、「社会的性格」(この語は「無力の感情」のなかではまだ使われていない)は、ここですでに、個人的性格特性と集合的(つまり社会・経済的に規定された)性格特性とのダイナミックな相互関係として描かれている。言葉をかえれば、フロムにとって、個人の性格は一定の社会的枠組みによって形成されているが、この社会的枠組みがまた、その成員の個人的性格特性の総和によって規定された集合的、「社会的」性格をもっているのである。両者は、相互に依存しあっているのだ。この理論には、ライブニッツのモナドのダイナミックなシステム——モナドのすべてが相互に依存すると同時にシステム全体の宇宙力学を生み出している——を思い起こさせるものがある。が、さらにいくらか詳しく検討するのは後にしたい。ここでは、この両タイプの性格——個人的性格と「社会的」性格——の形態的相互依存が社会・経済的過程のほとんど円環的な動きを暗示していることを指摘しておけば十分だろう。生産手段もしくは可変資本の再配分(弁証法的唯物論者が言うところのそれ)をもつても、資本主義社会の「社会的」性格を変えるには十分でないだろう。そのような変化が有効なものになるためには、それは内部から、つまり、より大きな社会的文脈のすべての成員から起こらなければならないだろう。

こうした基礎研究に先立って、フロムは、研究所の援助でフィールド調査を実施している。フロムがこの調査から、「無力の感情」の構想を暗に基礎づける統計資料の多くを手に入れたであろうことは明らかである。この調査の結果は長いあいだフロム個人のファイルに埋もれたままになっていて、これが編集されたのはごく最近のことである。この本の英語版のタイトルは『ワイマール・ドイツの労働者階級——心理学的社会学的研究』⁽²⁾である。すでに一九三〇年、フロムとその友人エルンスト・シャハテル、そして、アンナ・ハルトツポ、ヘルタ・ヘルツォーク、パウエル・F・ラザファースフェルトからなる

チームは、六四一の関連質問からなる質問票を作成し、三〇〇〇近い労働者に配付した。一一〇〇近くの完全票が返ってきたが、その多くは一九三三年に研究所がアメリカ合衆国に移った時に失われている。一九三四年に残っていたのはわずか五八四だった。この調査は、一定の明確に規定された社会階層に対する、批判理論の初めての実際的適用として企画された。同じ質問票は、研究所がその後おこなった共同研究『権威と家族の研究』⁽²⁾でも使われている。一九三〇年のチームの努力は明確な結論を出すにいたらなかったが、この実験的調査とその総括はさまざまな観点から興味深い読解を導くものとなった。これは単に、それ自身がパイオニア的調査研究だったというだけのものではなく、この歴史上の重大時機を生きた人たちの社会心理学的状態について、多くの洞察を可能にするものでもあった。質問票そのものがほとんどフロム自身の手になるものであることを思うと、その構成と質問の鋭さには、フロムが精神分析学者として経歴を始めた際の彼自身の実践的な志向性がうかがえさえるのである。

この研究を契機として生まれた研究は他にもある。ずっと後に、研究所の多様なメンバーが共同しておこなった労作、『権威主義的パーソナリテ』⁽²⁾は、基本的に理論志向の強いものだったとはいえ、この初期の研究に負うところが大きい。フロム自身にとっては、このフィールド研究は権威主義的性格特性の一貫した研究に実践的基礎を与えるものとなり、それはとくに『自由からの逃走』で具体化された。フロムは、晩年に統計的なフィールド研究の方法に戻っている。そうした努力の成果のひとつが、『メキシコの一村著における社会的性格』(一九七〇)という本に見いだされる。この本には、社会精神分析学的研究という特徴的なサブタイトルが付されている。⁽²⁾

『ワイマール・ドイツの労働者階級』は、けっして社会研究所の援助で出版されたものではなかった。研究所の歴史についての第一人者であるマーティン・ジェイは、後にフリードリッヒ・ポロックから、

完全票のほとんど半分が紛失したことが出版を困難にしたと知らされている。⁽²⁶⁾これは半分は真実かもしれない。けれども、もっと大きな決め手となったのは、集められた資料の発表用意ができていたとしても、その頃にはすでに、フロムと研究所の同僚たちとの間の亀裂が深いものになっていたという事実である。決定的な分裂はもはや時間の問題だった。しかもそれは、奇妙にも、このフィールド研究の最終の出版をめぐる論争によって加速されていったのだった。

確かに、エーリッヒ・フロムと他の一部の研究所メンバーとの関係は、いつからか緊張をはらんだものになっていた。セオドル・W・アドルノは、一九三一年にフランクフルト大学で哲学の助教授になり、その後しばしば研究所を訪れていたが、この彼がフロムをひどく嫌っていた。フロムの方でも嫌っていた。アドルノはレーヴェンタールとフロムを攻撃した。この両者はいずれも、当時まだなお正統派ユダヤ教を信奉しており、アドルノはこの両者を「職業的ユダヤ人」と揶揄した。また、マルティン・ブーバーに対する冗談——彼のことは「宗教的ティロル人」と呼んだ——も親しみのないものだった。気質の違いは早くから明らかになった。つまり、フロムの真剣で一徹な人生観は、アドルノやホルクハイマーやフリードリッヒ・ポロックの気まぐれで辛辣な自己皮肉的なパソナリティと衝突せざるをえなかった。このことに加えて、フロムの研究所での仕事がダヴォスへの強制的逗留によって中断を余儀なくされたことを思い起こさねばならない。フロムがスイスに在る間に、鋭敏にも国家社会主義者のせまってくる脅威に気づいていたホルクハイマーは、一九三一年、ジュネーヴで研究所の支部を創設している。フロムは、病気の回復に努めている間、研究所とはこの支部——支部長は最初はポロック、後にはアントゥワリス・シュテルンハイムとユリーエット・フアフェッツであった——を通して時々接触するだけだったのである。

一九三三年の三月、フランクフルトの研究所は新しい国家社会主義政府によって閉鎖された。研究所が「国家に対して敵対的な」態度を取ってきたというのがその理由だった。そのすぐ後、ホルクハイマーとアドルノ、さらに他のユダヤ人スタッフは、教師の地位を追われた。ホルクハイマーとその共同研究者の大部分はなんとカジュネーヴに逃れた。この地では、国際社会研究所——研究所はジュネーヴ支部の開設以後そう呼ばれた——を母体として一九三四年まで活動を続けた。ホルクハイマーが一九三四年にニューヨークを訪れたとき、彼はコロンビア大学の総長ニコラス・マレイ・パトラーに勧められて、研究所をニューヨークに移転させることにした。「こうして、二〇年代のフランクフルトで革命とマルクス主義を標榜していた国際社会研究所が、資本主義世界の中心、ニューヨークに腰を据えることになったのである」。

研究所が西一一七番街四二九に新しい本拠を見つけたのと同じ年、メンバーの大部分は海を越えて、ホルクハイマーとともにアメリカに亡命した。エーリッヒ・フロムは、それより前にシカゴ精神分析研究所の招聘で客員として連続講義をもっており、そのときすでに合衆国にいた。彼は一九三四年の秋までシカゴにいて、その後ニューヨークに移った。研究所のジュネーヴ支部は戦争中も活動を続けたが、かろうじてそうしているにとどまった。フロムは、一九三八年から一九三九年にかけて療養のためダヴォスに二度目の滞在をしたおり、再びここを訪問している。

研究所は、新世界への移転を転機として、急激に学問的な方向転換を遂げた。批判理論のさまざまな変転については他でもさまざまなに論じられているところであるし、またそれは、ここで分析するにはあまりにもこみ入りすぎている。⁽²⁷⁾ホルクハイマーと彼に近い同僚たち——一九三八年の一月にはセオドル・W・アドルノもこれに加わった——は、さらにいっそう抽象的な社会学的哲学的研究を志向す

るようになった。スタッフそれぞれの個人的な研究関心は、少なくとも表面的には、基本的に変わらずにいた。ホルクハイマーとマルクーゼは主に哲学を領分としていた。グロスマン、グンペルツ、ポロツクは経済学に専心していた。フロムはいぜんとして社会心理学の領域の代表だった。また、アドルノとレーヴェンタールは文化の理論を扱っていた。しかし、研究所の雰囲気は亡命によって根底から変化化した。彼らは、ひどく覚めた、ともすると悲観的な世界観をもったことに加えて——それはヨーロッパにおけるファシズムの勃興、戦争の切迫、そしてとりわけアメリカ資本主義をじかに観察することによって強められた——、批判理論を社会変革の道具として実践的に適用するという第一の希望を捨てた。その代わり、研究所の仕事は、文化的、審美的な現象の研究に向かった。この方向転換は、主としてホルクハイマーに対するアドルノの影響が増大したことによるものである。

その間、エーリッヒ・フロムは、精神分析学者としての自分の仕事を合衆国で再開していた。彼はニューヨークで開業し、この診療はその後も長く続いた。フロムは、研究所での教育義務を除くと、一九三七年以降、研究所の共同研究にはどれにも参加していない。フロイト理論に対するフロムの修正と批判は、はじめのうちこそ研究所で喝采をあげていたが、今やメンバーの一部からあからさまに退けられるようになった。フロムと、アドルノやマルクーゼとの関係は急速に悪化した。フロムが、もう古くなってしまったフィールド研究の成果(『ワイマール・ドイツの労働者階級』)を出版することを主張したときには、ホルクハイマーは、この研究そのものの科学的妥当性が当初から疑問だったと主張して、出版を拒否した。何がこの取り返しつかない亀裂を生んだのか、確かなことは何もわかっていない。パーソナリティや方法論にさまざまな違いがあったわけだが、最後には、なかでも財政的な問題が事態を決定的にしたようだ。研究所の財務部長だったフリードリッヒ・ポロツクが、フロムは分析診

療によって定期的収入を得ているのだから、彼の分の研究所の給料は他の困っている同僚たちにまわしてもいいだろうと提案した。これに対して、フロムは辞任を申し出、一九三九年一月に辞任した。彼は、終身在職権を失う代償としておよそ二万ドルを受け取った。当時、この額は小さなものではなかった。フロムの離脱のために研究所が被った財政的打撃は大きなものだったのである。フロムは研究所を去るにあたって、『ワイマール・ドイツの労働者階級』の素材も含めて、自分のノートすべてを持って出ていく。

この離脱はまた、ひとつの象徴的行為でもあった。エーリッヒ・フロムにとって、実習生の時期も、学問的理論家としての終身職に就いている時期も終わったのだ。新世界でのその後三〇年の間に、フロムは学問と精神分析の世界で急速に名をなしていった。しかもっとも重要なことに、何百万人もの読者を獲得した。彼の「著名な」著述家としての経歴は、この後二年のうちに始まっているのである。アメリカでの生活に深く溶け込んでいくことによって、フロムは今や、この社会の基盤を正確に、またしばしば痛烈に分析するために必要な洞察をうることができるのである。フロムにとっての批判理論とは、社会研究所の同僚の多くにとってのそれとは違って、哲学的内省や究極的諦観にいたるためのものではない。逆にそれは、フロム自身の社会診断のダイナミックな方法に、新しい形態と息吹きを与えるものであった。特徴的なことに、この診断は、そのもともとも陰惨なところにおいてもけっして希望を失っていない。フロムにとって、トンネルの向こうには常に光がある。ホルクハイマーとアドルノが、激烈な社会変動への期待をだんだんと放棄し、また、やや後にはヘルベルト・マルクーゼさえ幻滅にひたっていた一方で、エーリッヒ・フロムは、人間の自己再生の可能性に対するたゆみない信仰に頑として執着していた。このくじけない希望こそが、フロムの人生と業績の精神的支柱なのである。



- (1) フンク (一章' 社1) の p. 59 を参照されたい。
- (2) 左記雑誌の p. 22-29 を参照されたい。
- (3) *The Zeitschrift für Sozialforschung* (社会研究誌) はフランクフルトの Deutscher Taschenbuch Verlag にて出版され、一九〇九年にはより手に入りやすくなった。ホルクハイマーの理論の詳細については、特にメイニタール (一章' 社4) による所記を参照されたい。
- (4) "Geschichte und Psychologie," *Zeitschrift für Sozialforschung* 1 (1932): 125-144, 11 の部分は p. 135, 私の英訳。
- (5) "Über Methode und Aufgabe einer Analytischen Sozialpsychologie," (邦訳「分析的社會心理學の方法と課題」) *Zeitschrift für Sozialforschung* 1 (1932) : 28-54
- (6) Die Entwicklung des Christudogmas. Eine Psychoanalytische Studie zur Sozialpsychologischen Funktion der Religion," (邦訳「キリスト論教義の変遷」) *Imago Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf Natur- und Geisteswissenschaften* 16 (1930) : 305-373
- (7) *Zeitschrift für Sozialforschung* 1 (1932) の中の p. 174 以下のボルケナウの論文を参照されたい。
- (8) "Über Methode und Aufgabe..." (社10) p. 34. 私の英訳。
- (9) 同論文 p. 45, 私の英訳。
- (10) 同論文 p. 46, 私の英訳。
- (11) この雑誌は *Psychoanalytische Bewegung* 3 (1931) の p. 440-447 に掲載されているフロムの短い論文である "Politik und Psychoanalyse," とともに見出されている。その p. 441 を参照されたい。
- (12) "Die psychoanalytische Charakterologie und ihre Bedeutung für die Sozialpsychologie," (邦訳「精神分析的社會心理學の方法と課題」) *Zeitschrift für Sozialforschung* 1 (1932) : 253-277, 11 の部分は p. 269.
- (13) *Zeitschrift für Sozialforschung* 3 (1934) : p. 196-227.

- (14) "Robert Briffaults Werk über Mutterrecht," (邦訳「ロベール・ブリアールトの母權についての著作」) *Zeitschrift für Sozialforschung* 2 (1933) : p. 382-387.
- (15) In: *Zeitschrift für Sozialforschung* 4 (1935) : p. 365-397.
- (16) "Die gesellschaftliche Bedingtheit" (邦訳「精神分析構造の社会的制約性」) (社15) p. 397. 11 の引用は英語の要約論文から取っている。文體上の表現が不適切なのは明らかだが、フロムの言わんとしていることはおぼたぐはくありしている。
- (17) "Socialpsychologischer Teil," in: Max Horkheimer, ed., *Studien über Autorität und Familie*, Forschungsberichte aus dem Institut für Sozialforschung, I. Abteilung. Theoretische Entwürfe über Autotität und Family (Paris: Félix Alcan, 1936), pp. 77-135
- (18) *Zeitschrift für Sozialforschung* 6 (1937) : p. 95-118.
- (19) "Zum Gefühl der Ohnmacht" (邦訳「無力の感嘆」) (社18 参照) p. 95. 私の英訳。
- (20) 同論文 p. 114. 私の英訳。
- (21) Wolfgang Bons, ed and translator, *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reiches Eine sozialpsychologische Untersuchung* (stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1980).
- (22) (Cambrege, Mass: Harvard University Press, 1984).
- (23) 注17 を参照されたい。
- (24) Theodor W. Adorno with Else Frankel-Brunswik, Daniel J. Lewinson, and R. Nevitt Sanford, *The Authoritarian Personality* (new york: harper & bros., 1950) マーカス・メイニタール編集 Foundations of The Frankfurt School of Social Research (一章' 社4) に、短くが、説得力のあるフロムに関する作品の評価が Franco Ferratotti, "The Struggle of Reason against Total Bureaucratization," (p. 235-252, 特 p. 241 以下) に引用されている。
- (25) Erich Fromm and Micael Maccoby, *Social Character in a Mexican Village A Sociopschoanalytic*

Steady (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1970)

- (26) ジェイ(一章、注4参照) p. 117.
 (27) 同書 p. 39.
 (28) タールとジェイによる優れた研究(一章、注4)を見られたい。
 (29) この論争のいくつかの相反する見方については、ジェイ(一章、注4) p. 110と、フンタ(一章、注1) p. 68以下を参照されたい。
 (30) フロムが研究所を離れた詳細の一部は、ボンスによって出版された本(三章、注22)のp. 28を見られたい。

第四章 総 合——「自由からの逃走」(一九四一)

エーリッヒ・フロムは、学者や作家など、同輩の移住者たちの多くが味わっていた困難を尻目に、移住先の新しい社会と仕事の状況に、そしてことさら新しい言語環境に、ほとんど苦もなく溶け込んでいった。彼の英語は、それほど違者なものだった。フロムは、社会研究所の哲学的志向の強い同僚たちとは違って、観念を正確に定式化する手段として、とりたてて母国語に頼る必要がなかった。とくにホルクハイマーとアドルノは、母国語で活動できる場所が失われたことでひどく落胆し、思想を表現することに強く不自由を感じていた。哲学とは、そう簡単に別の言語に翻訳されるものではない。ホルクハイマーは、ドイツ人移住者たちがその言語的(それゆえまた文化的)ルーツを素早く、すすんで捨て去ったことを辛辣に批判しながら、この状況を次のように書いた。「ドイツ知識人たちは、ドイツ語ゆえに多くの読者をえられないということになると、ほどなく外国語を使うようになる。それは、彼らにとって言語はすでに真実の表現としてよりも、彼らを一層生存への苦闘に追いやるものとなっているという事実の現れである。」¹⁾しかし、エーリッヒ・フロムにたいして、このような批判の後半部は当てはまらない。英語は急速に、そして永久に彼の「第一の」言語になった。彼はこの言語を使って、数々の著名な本を書き、自分の目に映ったとおりの真実に十分な表現を与えたのである。

一九四〇年、フロムはアメリカ市民権を認められた。その時には、彼はすでに臨床分析家として成功



していた。一九三四年の一月には、フロムはニューヨーク六六番街のアパートから、セントラル・パーク西四四番地のアパートに移っていた。それから九年後、今度はセントラル・パーク西三二番地に移った。そして、一九四〇年から一九四一年まで、彼はコロンビア大学のアメリカ精神分析研究所で客員助教授の地位にいた。一九四一年、彼はバーモント州のベニントン・カレッジで教職につき、後に一九五〇年に退職するまでここで精神分析を教えた。彼のスケジュールは忙しく、月曜日ごとにベニントンで講義とセミナーをもっていたほか、客員としてたくさん講義を行い、またその他の週日はニューヨークの自分のオフィスで臨床を行っていた。彼はたいてい、金曜日ごとにベニントンへ帰って週末をすごした。一九四一年以降、彼はまた、アメリカ精神分析研究所でしばしば客員講師をつとめた。フロムが時をまたずアメリカの精神分析の仲間を受け入れられたのは、カレン・ホーナイ(彼女はこれ以前、一九三三年にフロムをシカゴに招へいすることに尽力していた)、そしてハリリー・スタック・サリヴァンとの親交によるところが大きかった。ホーナイとサリヴァンは、当時、アメリカ合衆国でもっとも影響力のある新フロイト派精神分析家に数えられていた。フロムとサリヴァンは、ホーナイをとおして知り合った。ルース・ベネディクト、エイブラム・カーディナー、クララ・M・トンブソン、ウィリアム・シルヴァーバーグとの場合もそうだった。フロムと、名著『現代の神経症的パーソナリティ』(一九三七)の著者であるカレン・ホーナイその人との関係については、いくつかの証言がある。二人が最初に出会い、その後の長い親交の出発点となったのは、フランクフルトのカール・ランダウアーのサークルと、バーデン・バーデンのゲオルク・グロデックのサナトリウムだった。カレン・ホーナイは、フロムの人生、とくにフロムの最初の結婚が破綻した後は、徐々に強い母親的な人物の役割をたすようになっていた。⁽²⁾ホーナイとフロムはしばしば、フロムの友人であるエルンスト・シャハテル、

アンナ・シャハテル夫妻を伴って、ホーナイのアパートか、六四番街に住んでいたサリヴァンのところに集って、週末をともした。クララ・トンブソンもまた、すぐ近くの八三番街に住んでいた。このころ、フロムはホーナイの個人的神経症の理論に強く影響されていた。他方、ホーナイの方もまた、フロムの集合行動の分析と社会的性格の研究に、つまりフロムの社会学的アプローチに感銘を受けていた。一九四一年まで、フロムとホーナイとシャハテル夫妻(エルンスト・シャハテルは実験心理学の専門家で、後に精神分析家になった)は、しばしば長い休暇をともに過ごした。一九三八年にフロムの病気が再発して、ダボスでの療養を余儀なくされた時に、ホーナイはフロムをスイスに訪ねている。

この温かく、また両者にとって生産的な関係は、一九四一年に綻びをみせはじめた。一九四一年四月二十九日に行われたニューヨーク精神分析学会の年次大会で、ホーナイはその非正統的な教育と分析の方法を理由に、会員の大部分から非難を受けた。さらに、学位論文を指導することを禁じられ、学部学生の教育に「降格された」。ホーナイに敵対する人々には、カーディナー(彼はその著『個人と社会』(一九三九)で自らの理論的立場を明らかにし、ホーナイの神経症理論に強く異を唱えた)、シャインドル・ラドラー、カール・ビンガー、ジョージ・ダニエルズ、デーヴィッド・レイヴィらがいた。ホーナイは、抗議して学会を去った。彼女にしたがったのは、ハーモン・S・エフロン、セアラ・R・ケルマン、バーナード・S・ロビンズ、そしてクララ・トンブソンだった。彼女たちは、ウィリアム・シルヴァーバーグとともに精神分析促進協会を設立した。シルヴァーバーグが会長、トンブソンが副会長になった。その教育部門である、アメリカ精神分析研究所は、その後、南五番街病院の一部となった。エーリッヒ・フロムはこの研究所に最初から実質的に加わった。しかし、フロムの講師ならびに臨床分析家としての地位は、当初、フロムが医学者でないという理由で、さまざまなメンバーから疑問視された。一九四一



年一二月、フロムの正式なスタッフとしての地位はしどろしどろながら認められたが、ふたたび一九四三年に、臨床実習を教える資格が非難された。フロムを降格させようとするこの企ては、ホーナイの勢力範囲から出ていたと考えられる。その時の研究所長であったクララ・トンブソンは、このいさかきを調べるために調査委員会を作った。委員会は、フロムから正式スタッフとしての地位を奪う決定をした。トンブソンはこのような裁定に不満だった。そして、臨時のスタッフ会議で、研究所内の三つの顕著に異なる分析「学派」の三人の主張者——ホーナイとサリヴァンとフロム——のあいだの個人差が明らかにその当時の勢力争いをひきおこしたのだと論じた。その時、トンブソンは和解を提案していた。しかし、彼女の懇願は無益だった。フロムは結局、辞表を提出した。彼とともに、トンブソン、サリヴァン、その他のさまざまな分析家たちが研究所を後にした。

ほとんど疑いなくだが、カレン・ホーナイは、一九四〇年代の初め、ホーナイ自身の思想に対するフロムの影響が次第に大きくなっていったこと、そして、学生たちの間でフロムの人気がどんどん高まっていたことに脅威を感じていた。一九四一年『自由からの逃走』の公刊は、ほとんど一夜にして、学生たちのあいだに、フロムは教祖という装いを与えた。これより前、一九三七年に、ホーナイは、この友人が『自由からの逃走』(フロムは当時既にこの仕事にとりかかっていたが、まだ完成にはほど遠い状態だった)を自分の息のかかった出版社、ノートンから出版する手助けをしようとしていた。しかし、ノートンは断った。結局、本はホルルト・ラインハート・アンド・ウィンストンから出版され、とてつもない成功をおさめた。ホーナイは、自分が面倒をみてきた仲のいい同僚に対して、学者として少なからぬ嫉妬を感じていたに違いない。それゆえ、フロムが研究所で圧倒的な存在となることにたいして最終的にホーナイが反対したのも、振り返ってみれば、ほとんど自己解放の行爲とも見える。それに加え

て、ホーナイの娘マリアンヌは、一九三九年にフロムのもとで精神分析を受けた。その結果、マリアンヌは母親の抑圧的パーソナリティに反抗するようになった。カレン・ホーナイは、自分とマリアンヌとの関係にひびがはいったことをフロムのせいにした。フロムとホーナイとの亀裂は誰の目にも明らかなものとなり、修復不能になった。

エーリッヒ・フロムは、アメリカ精神分析研究所を去った後も、ハリリー・スタック・サリヴァンとの密接な絆を続けた。事実、ふたりの親交は、一九四九年にサリヴァンが死去するまで続いた。サリヴァンはワシントンのウィリアム・フランソン・ホワイトのもとで精神医学を学び、アメリカでは精神分裂症の一流の権威のひとりだった。彼は、ワシントンですでに、冗談で「十二宮クラブ」と呼ばれていたインフォーマルな友人仲間の集まりを始めていた。禁酒法のこの時代、サークルのメンバーたち——当時は、トンブソン、シルヴァーバーグ、エドワード・シブリー、そしてサリヴァンの継子ジミーがいた——は、ばかげた禁制をやぶってアルコールを呑みながら、にぎやかに学問的議論をしていた。後にフロムは、しばしばこの「十二宮」の集まりに加わるようになった。フロムがジョン・ダラーとマーガレット・ミードに出会ったのもこのサークルであった。また、パウル・ティリッヒとも旧交を温めることになった。ティリッヒは、名高い哲学者、神学者であり、当時はニューヨーク統一神学校で教職にあつた。現代の心理学と社会学を基礎にしたティリッヒのプロテスタンティズムの再生は、フロムにアピールするものをもっていたが、ふたりは親しい関係には進まなかった。予言者同士は、往々にして相手の内輪に入っては寛げないものである。

一九三六年、サリヴァンはワシントン精神医学学校を設立した。そのニューヨーク分校を創設したのは、サリヴァン自身と、エーリッヒ・フロム、フリーダ・フロム、ライヒマン、デーヴィッド・リーオクと



ジャネット・リーオクの夫妻、そしてクララ・トンブソンだった。一九四六年、この施設は改名、改組されて、ウィリアム・アランソン・ホワイト精神医学・精神分析・心理学研究所となった。フロムは一九四六年から一九五〇年までその主任教員を務め、その後も長い間スタッフとしてとどまった。フロムはまた、後に研究所の所長となったアル・G・ヴァン・テンベルクの親しい個人的友人でもあった。人文科学から自然科学、経験科学にまたがるさまざまな分野の異種交配を目指した革新的なカリキュラムは、理論と実践の両面をにらんだフロム自身の二重の志向性に資することが多かった。事実、ホワイト研究所の空気は、「経験的観察と思索を結合することに優れた価値」を見いだそうとするフロムの信念を堅固なものにした。フロムは、一九五一年にメキシコへ移住した後、定期的にウィリアム・アランソン・ホワイト研究所にもどって、夏期セッションやその他のセミナーなどに参加している。

エーリッヒ・フロムの著述家としての初期の名声は、そのほとんどがもっぱら最初の本、『自由からの逃走』の成功によるものである。以下にやや詳しく論じるように、フロムはこの研究で、自分が行っている社会心理学的訓練の理論的基礎と、この本の主題である二つの社会システム——権威主義的ファシスト国家とアメリカ民主主義——についての自分自身の観察結果とを、初めて有意義な姿で統合している。前者のシステムは、フロムが「非合理的」権威と呼ぶものの圧制的権力によってがちりと固められているが、他方、後者は独占資本主義の経済原理に基礎づけられている。フロム自身が展開する批判理論は、今や、心理学志向をもった、スケールの大きな社会批判と結びついている。歴史の連続的相関性についてのフロムの認識は、ヘーゲルやマルクス、さらには、国際社会研究所でのホルクハイマーその他の教示によるところが大きい。この点、この本の歴史的記述の部分についてはある程度、おそらくはフランツ・ボルケナウの研究、『封建的世界像から近代的世界像へ』(一九三四)に啓発された

ところがある。しかし、歴史上のある時点での個人と、特定の社会・経済的形態の全体との心理的、社会的相互関係については、フロムはもっぱら自分独自の方法に基づいている。

フロムは、『自由からの逃走』の前書きで、この本は「現代人の性格構造」ならびに、心理学的要因と社会学的要因の相互作用の問題に関する「大がかりな研究の一部にすぎず、研究の完成にはかなりの年月を要するだろうと、述べている。ここで注目しなければならないのは、彼のその後の著作と論文のすべてが本質的にはこの問題に関するものであるということだ。つまり、すべてが同じ記念碑的作品の個別部分とみなしていい。それらは、それぞれまったく独自の前提にたっている場合でも、なお複雑に相互関連しており、まったく同一の議論が、形を変えて何度も現れたり、そのまま繰り返されたりしている。その一方で、この多面的な研究には、さまざまな観念の豊かな連続と増幅だけでなく、著者の思想の多少なりとも直線的な発展が見られる。それゆえ、個々の著作に対するこれ以後の議論では、研究全体を相互参照的な視野に入れるよう注意しなければならないし、また、この結果生じている繰り返しの部分には目をつぶらなければならない。

全体として、まずはじめに強調しなければならないのは、フロムの「人気のたかい」著作には、時折、その印象づけが強いという作風により戸惑わされるという点である。(このような例は初期の学問的著作にはまったくない。)このことがもっぱら彼の英語力(彼にとって英語は母国語でなく習得言語である)によるものであるかどうかは容易には判断できない。おそらくここには、たかさんの、それも大部分は専門家でない読者に語りかけようとするフロムの意図がはたらいっている。また、フロムの著作をめぐる論争の一部は、彼自身がしばしば遠回しな、時には矛盾を含むような用語法をとっていることが口火になっている、という事実もある。そのうえ、フロムはしばしば、機知にすぐれた読者を欲求不満



に陥らせるような、要点繰り返しの技法を用いている。各章は、たいていその章の議論の要約で始まり、その章の議論の簡単な概要で終わる。そしてこの概要が、しばしばさらに次の章の冒頭へと重ねられていく。このような冗長ともいえるわざとらしいやりかたは、さまざまな批評家たちを苛立たせてきた。しかし、そうしたことは、絶えず要点を言い換えることによって、読者を説得しようとする念入りな努力なのである。それは、解釈学的立論の「ソクラテス的」形式の修正版であり、おそらくは、著者フロムの初期のタルムード研究から生じているものだろう。

『自由からの逃走』は、著者フロムの著述家としての成功の突破口なのだが、これは、フロムの著作に典型的に見られる同じ三段階構成で組み立てられている。一章から三章までは、フロムの性格変化研究の歴史的枠組みが示されている。この部分には、さらにはっきりとした二段階のアプローチが識別できる（そのことについては後で論じる）。四章と五章では、現代人の心理構成にたいする診断的分析が示される。この診断的アプローチにも二つの焦点があると言ってよいだろう。第一は、より大きな社会・経済的条件、第二は、資本主義社会の個人的性格特性と集合的性格特性である。第三の、そして最後の段階は、六章と七章に現れる。ここには、ファシストの権威主義システムのなかに住む人々と資本主義の民主主義社会に住む人々との相互に異なる行動パターンが併置されている。この本の本体の結論は、個人と社会全体の双方に対する生（ライフ）の改善に向けての現実的示唆で終わっている。

この本には、「性格と社会過程」と題された付録がつけられている。これは、エリッヒ・フロムを真剣に学ぼうとする者にとって、この本のもっとも重要な要素であることは疑いない。だから、読者は、本文そのものを読むための前提条件として、まず最初にこの付録を注意深く読んでおくのがよいだろう。この二〇頁ほどの小論のなかで、著者フロムは自らの性格学理論を再定式化し、再構成している。それ

は彼の一九三〇年代の諸論文、とくに「分析的社会心理学の方法と課題」、「精神分析的性格学とその社会心理学的意義」、「無力の感情」においてすでに探究されていることだが、フロムはここで初めて、有効な理論的基礎に立つ議論をしている。彼はまた、この小論で初めて「社会的性格」という重要な用語を用いている。非ドイツ語圏の読者にとって、フロムの著作全体から何らかの深い洞察をえようとするならば、この短い論文は前提条件である。『自由からの逃走』についての以下の議論は主に性格学の諸原理に関する理解にもとづいているから、まずは付録の意味と内容を説明しておくべきだろう。

フロムはまず、ある一定の社会集団に属するすべての成員は、共通な特性を共有しているという仮定からはじめる。この仮定は、すでにあげた諸論文や、フィールド研究『ワイマール・ドイツの労働者階級』で検討され、みごとに証明をえている。そうした性格特性は、全体としてみると、フロムが社会的性格と呼んだものを形作る。その主要な行動パターンからはずれるものは、理論に関係のないものとして無視される。フロムによれば、社会過程はそのいかなるものも一定の社会的性格とのかかわりで分析されなければならない。なぜなら、社会的性格は、現行の社会的枠組みの産物であるだけでなく、その維持や現実の変動を担うただひとつのエイジェントでもあるからだ。したがって、社会的性格は、ある集団もしくは社会がすべての個々の成員に及ぼす、主要な形成作用と見なされなければならない。

人間が社会条件に適応することによって発達させる諸特性は、その人がしなければならない行為をその人がしたい行為に変えてしまう。つまり、ある一定の社会の多数派の人々の性格―社会的性格―が、この社会で個人がしなければならない客観的課題に適応しているならば、人々のエネルギーはうまく型どりされて、人々をその社会の機能にかかせない生産力に変えてしまう。⁸⁾



それゆえ、特定の社会的性格にもっとも完全に適応した諸個人は、物質的な成功、かれらの仲間集団の尊敬と認知、そしてとくにかれらの環境と調和していたいという感情などによって酬いを与えるだろう。権威主義的でヒエラルヒーの社会環境は、権威に対する強い志向性（これが社会的性格の基礎になる）を共有する諸個人からなり、必ずやまた、等しく権威主義的傾向をもった諸個人を生みだし、彼らがまたその優勢な社会的性格特性を熱心に再生していくだろう。同様に、物質的財の蓄積と消費（これが社会成員の多数派に共有された社会的性格となる）に基礎づけられた社会は、必然的にこの性格特性を子供の養育において強化することになり、結果として新しい世代にさらに強い消費志向性を生みだしてしまう。フロムはこのように支配的な多数派もしくは階級の命令によって個人特性が形と型を与えられていく過程を叙述しているが、これに大きな影響を与えているのは明らかにマルクスその人、そして彼を引き継いだヴィルヘルム・ライヒである。ライヒはその基礎的な研究、『ファシズムの大家心理』（一九三三）のなかですでに、「それぞれの社会は、その成員大多數のなかに、その目的を達成するために必要な「行動と思考の」構造を生み出している」という問題を、正確に指摘している。しかし、フロムにとっては、社会的性格は相互補完的機能をもっている。つまり、一方でそれは、社会集団の成員とその優勢な志向性によって規定されている。そして他方では、この集団の心理的イデオロギーの構成と同様に、社会・経済的構成の現状を維持する機能も果たしている。こうして、社会的性格は社会秩序を維持する心理的因子を生みだす。このことをフロムは、「セメント」、つまり一定の社会構造がもつるもの（¹¹）のプロックをつなぐものと、うまく比喩している。

社会的性格を植えつけるはたらしきをする主な制度は、家族と教育システムである。次の図は、この個

人的性格と社会的性格のやや複雑な相互関係を理解するために役にたつだろう。

もっとも、社会的性格をこのように図解すると、人間存在はもろもろの社会的（つまり外的）条件によってもつばらあらかじめ決定されているように受け取られるかもしれないが、フロムはそのような結論を「社会学的相対論」として批判している。確かにフロムはフロイトとは違って、しかしマルクスとはまったく一致して、「人間がまず第一に社会的存在である」ことを認めている。けれども彼は、それにもかかわらず人間の性格をダイナミックに定義し続けている。そしてフロムは、フロイトの性格学にすこしのリップ・サービスもすることもなく、全著作を通してこの点を頑固に主張し続けている。フロム



ムの主張するところによれば、この人間性の「ダイナミクス」は、「社会過程の進化的動的因子となっている」。彼は、外的に負わせられた性格特性（¹²社会的性格）の集合的ではしばしば不活性な拘束のなかにダイナミックな力（¹³人間性）を仮定しているが、このことがフロムの性格学を、「心理学的な」フロイトの概念ともマルクスの「経済学者的」アプローチとも異なったものにしてしている。人間性が優勢な社会的構えにダイナミックに適応している限り、それはまた、新しい観念や概念を等しくダイナミックに導入することによって、この構えを変えられることのできるものであり続ける。事実、フロムの進化論全体は、もっぱら次のような仮定にもとづいている。

すなわち、人間性は、その内在的で自律的な生産力によって、歴史の特定の時代に優勢な心理的、イデオロギー的、経済的条件に絶えず変化を起こしていく、というものである。このような、エーリッヒ・フロムのこれ以後の著作のすべてに実際に浸透していく、力強く、しかし楽観的でさえある原理は、あきらかに『自由からの逃走』の本論とは矛盾している。以下の分析は、この矛盾を際立たせ、そしてその解決の可能性を探る試みである。

第一章では社会心理学の課題を概略する。要約すれば、社会心理学とは、さまざまな歴史的背景のなかで出会う広範囲な異なった性格特性の究明である。フロムによれば、自由とは、人間という概念がそこから発生するような、主として心理学的な「問題」である。歴史的發展が人間の進歩によって促進されるのと同じくらい、逆に人間自身も、社会・経済的環境の変化する条件によって形成され、また型どられる。こういった文脈のなかでもっとも重要なのは、適応という概念である。人間性は、一般に行われている生活の型に合わせるよう要求され、さし迫られると、ダイナミックに適応する。もちろん、こういった生活の型は、一定の経済的基盤やイデオロギーのような上部構造の産物である。結果的には、「自由」という概念は、「両刃の實在として現れる。つまり、人間は、いったん「人間と自然との根源的な一体性」がうばわれれば、「個人」になる。そして、個人的な自由は、どんな社会関係にも多かれ少なかれ盲目的に適応するか（最終的には自由の喪失という結果になる解決）、さもなくば、自発的行動や愛や生産的存在であることをおとして、個人的自由を宣言し直すかの決定を迫られる。

このような個人の出現と、それに引き続いておこる、基本的には損なわれない世界からの人間の離脱は、社会経済的、心理学的、歴史的現象の連鎖反応と説明するのが最適かもしれない。フロムにとっては、この連鎖反応は、弁証法的な歴史過程であり、この本の二章と三章で長々と論じている。中

世をとおして、この人間同士、そして自然との神秘的「一体感」は、かなり広範囲にまだ損なわれてはいなかったとフロムは言う。封建社会では、あらゆるものを包含するような一連の取り決めが、生活のあらゆる側面を支配することによって「個人的」自由を犠牲にしてきたが、「現代」人に特有である疑惑と不安の要因は、人間の意識のなかにはまだはつきり見られなかった。すべての人間は、社会関係のなかで、「はつきりした、不変の、疑うことのない」位置にあった。多分、社会秩序は、自然の秩序にかかっていただろう。主体に課せられるあらゆる制限にもかかわらず、フロムは「現実生活には、かなり具体的な個人主義があった」と断言する。

このような中世の生活のいくぶん理想化された像は、ヤコブ・ブルクハルトの中世社会の描写とルネッサンスの精神にもとづいている。しかし、一九三〇年代にあつてさえ、こうした見方は、多くの歴史家にとってすでに時代遅れだった。確かに、中世には個人が階級を上下することは、ほとんど、あるいはまったくなかった。三つの水平に分けられた階級——貴族と牧師と農奴——とのあいだには、厳格に階層的な秩序が行き渡っていた。一九二〇年代に、個人の自由に向かう最初の、きわめてゆっくりとした運動として都市化が始まった。こういったことは、すべてそのとおりだ。だが、封建制度内での生活は、支配者の富と繁栄とのために働くことを余儀なくされていた圧倒的大多数の人びとにとっては、理想的どころではなかった。人びとは彼らの最低限の生活にさらに重荷を負わされていただけではなく、間違いなく、ある初期の形態としての疎外を経験していたに違いない。彼らの全労働の実りは他人の利益という溝にもう一度流し込まれていたのだから。明らかに人びとは、私有財産の蓄積からは排除されていた——フロムはそれを、「少なくとも腐りきった世界には、必要な制度」と考えている。だが、中世の経済システムは、フロムの共産主義の「理想」とは正反対である。さらに、中世社会の生活が、フロ

ムの言うように、心理的に安全で、平安なものであったかどうかは疑わしい。明らかに人びとはさまざまな恐れや、迷信、さらには集団ヒステリーにさえ悩んでいたし、しばしば神経障害によって苦しんでいた。こうした恐れのおおきは、当時の精神的、そして世俗的支配者たちによって、大衆を抑圧する方法として巧みに操作されていた。

読者は、フロムが描く中世社会の少し歪んだ像に共感できないのももつとまらう。そして、『自由からの逃走』が歴史家の著作ではないことも心に留めておくよう、とのアドバイスにも耳を傾けた方がよい。考慮しなければならぬ問題は、中世の生活が実際はどうであったかではなくて、むしろフロムが、そうであったであろう中世の人びとの社会的性格を描こうとしていることだ。中世は、単に彼の進化の理論のモデルとして使われているだけだ。続いて起こる中世の「自由」の破壊には、二つの要素が主な原因となる。すなわち、経済システムの変化および、それが個人的、社会的性格にあたえた衝撃と、宗教改革とそれに関連のある理論や、イデオロギーの影響によって引き起こされた社会的性格の再度の変質である。一五世紀から一六世紀にかけて、商業は徹底的な変化を経験した。それ以前は、小売りと卸売りは、まだはっきりと分離していなかった。都市化とその新しい交易の中心に資本を蓄積した結果、お金はそれ自体が目的になった。お金は、以前には物質的の身をうるという目的にたいする手段であったのに、需要と供給による市場が発達し、まもなく、市場商人の命令が、経済生活を規制した。明らかに、フロムの社会・経済過程の弁証法的描写は、カール・マルクスの理論に従っている。便宜のためか、——あるいは用心からか——フロムはしばしばイギリスの経済学者リチャード・ヘンリー・トニーの著作から引用する。トニー自身はと言えば、マルクスに恩恵を受けている。フロムにとってもそうだが、トニーにとつて、出現しつつある資本主義経済は、人間性の自己認識を迫られる、連続的

で根源的な変化の最初の、明確な要因である。生活の「自然な」秩序は、中世の生活が保っていた、いわゆる「一体性」と壊れていない全体性から根本的にはかけ離れた、人工的に課せられた一連の決まりや価値に置き換えられた。

……世界は境界がなくなり、同時に、脅威をあたえるものになった。閉じた世界のなかでの固定した位置を失うことによつて、人間は、彼の人生の意味にたいする答えを失う。その結果、彼自身と彼の人生の目的にたいする疑いが、彼に生じてくる。

このようにして、新しい形の自由が、経済的变化をとおして生まれる。人間は、商業世界前の楽園から追い払われ——ここでは、すでに議論した、フロム自身の少年期の経験が鮮かに思いおこされよう——今や、金融市場によつて命じられる生存競争に従事しなければならない。フロムによれば、疑い、孤立、不安、無力感が、こういった弁証法的な社会、歴史的過程の直接的な結果である。(もう一度言うが、このような感情が中世社会にはまだ存在していなかったというのには信じがたい。とくに、この時代の文学は、支配階級の世界をもっぱら扱い、大衆のより惨めな生活にはほとんど配慮はしていないが、そういった感情が存在したことの豊富な証拠を提供している。)個人内部のこうした性格の変化は、全体として社会的性格の変化を反映している。だが、それぞれの人間は、この新しい、出現中の社会的性格と対応するために、個人的基礎のうえに、そうした変化を受けとめねばならない。適応は、それに必要な結果として現れる。

「自然」な、あるいは、原始的な自由から離れる第二段階は、ルター主義とカルヴィン主義が、個人の



意識や集合的意識に植えつけられていった影響力を行使し始めた時におこった。マルチン・ルターという人間自身は、現代の「権威主義的な」性格を予期させる実例と見られる。彼の世俗の権威にたいする愛憎的な関係は、プロテスタント的な職業倫理観の形成に決定的な役割を果たしたが、反面、それは、複雑に服従の原理に結びつきがちだった。マックス・ヴェーバーは正確にこの現象を描いた。⁽²⁰⁾ 一般にプロテスタンティズムによって一般化され、カルヴィニズムによってさらにあまねく行き渡った謙讓と服従は、初期の資本主義の新しい社会的性格の重要な側面になった。フロムは以前に、「利己主義と自己愛」(一九三九)という論文のなかで、この問題に触れていた。今や彼は、新興中産階級の構えの大きかりな検証に従事する。

ルターの世俗の権威にたいする服従よりもむしろ、カルヴィンの予定説の教義のほうが、新しく、重要な性格特性の発達の手助けとなった。すなわち、無力感である。さらに、この教義は、人類の基本的な不平等を強調するので、フロムによれば、それは、国家社会主義のような権威主義的イデオロギーの際立った先駆けとみななければならない。この点においては、あらゆる人種差別主義者あるいは、ヨーロッパ社会における一定の社会的性格に見られる差別的な特性は、少なくとも一部は、このような影響によって補強されたとつけ加えてもよからう。産業界を支配する白人層は先天的に優秀だとするポスト・カルヴィン主義の信念は、人種的、性的差別の原因となる要因の一つであり、それは今日でも、アメリカをはじめ、いたるところでまだみられる。

こうして宗教改革のあいだに教えられた自己服従と自己卑下は、個人に自分が無力だという感情を生じさせていった。大変しばしば、このような感情は、現代人の激しい自己嫌悪の形で内面化されている。他方それは、外に向けては、攻撃的で、うとうとし、一般的に威圧的な社会的性格という形をとるだ

らう。こうした環境のなかでは、他人にたいする愛も、自己自身にたいする愛も育ちようがない。人生におけるもっとも強い肯定的、創造的力としての愛は、いくつかのサリヴァンの著作で論じられている。フロムもまた、彼の多くの著作のなかで愛の重要性を強調している。それは、『人間における自由』(邦訳)(一九四七)に始まり、『愛すること』(邦訳)(一九五六)で頂点にたつする。人間が愛する能力を徐々に失っていくことは、『自由からの逃走』で描かれた進化形態のもっとも本質的段階のひとつである。資本主義の勃興とともに、新しい性格構造が出現した。それは、おもに物質的豊かさを志向しているが、愛する能力という点からみると、しだいに不毛になっている。この新しい性格構造は、「経済的、社会的変化の結果であり、宗教的教義によって強化された結果だが、逆に、さらに一層の社会的、経済的發展を形成する重要な要因になった。」⁽²¹⁾

これに続く二つの章は、この本の中心をなしているが、フロムはこのなかで、この新しい、宗教改革後の社会に固有な性格を描写していく。四章は、おもに経済的観点からの現代の資本主義社会の分析に当てられている。自由の二つに分岐した側面が、現代人に経験されている。第一は、すでに議論済みだが、孤立、孤独感、恐れ、無力感へとつながる。第二の側面は、それにおとらず重要である。すなわち、中世後の人間は、しだいに「独立し、自己を頼るようになり、批判的に」なっていることである。人間存在は、こうして束縛と支配という一見矛盾する二重性によって定義される。すなわち、真のそして本質的な人間存在が徐々に縮小していくことと、それと並行しておこる、技術的、文明的精巧さの増大である。束縛は、ずっと増えつづける資本の力によって、経済的にはさらに強化される。つまり、「中大においては、資本は、人間の下僕だったが、現代社会においては、資本は人間の主人になった。」⁽²²⁾ 労働は、かつては、必然的に自発的で、しばしば納得できる活動だったのに(少なくとも、フロムの理想化



された中世社会の見方では、今や商品や富の蓄積を主な目的とした強制的な活動になっている。(ここで、マルクスの「労働の疎外」という概念の長い議論が続くが、それはここでは議論の目的のためには概略する必要はなからう。)このような発展の大きな要因は、個人の感情的な不毛化につづいて、独占資本の着実な増加があげられる。現代資本主義社会では、労働や商品製造の過程は、以前は個人の労働者の活動に直接関係していたのに、ますます個人的な知性の介入を許さなくなってきたっており、それによつてますます「疎外」されている。

独占的な市場システムが強まるにつれて、広告産業が作られた。日常生活にたえず存在し続ける広告の作用の心理的影響が、さらに個人の重要性を減少させる。あらゆる欲求や願望が商業的に操作されている人間は、自分自身にとつても、周囲の社会的性格にとつても、弱くて、無意味な存在として受けとられる。彼自身のアメリカ資本主義の観察に基づいて、フロムは、「広告業とマス・メディア機構は、「批判的思考力を鈍化する方法」をとっており、「わたしたちの民主主義にとつては、それにはたいする多くのあからさまな攻撃よりよっぽど危険……」であるという結論にたつする。大変興味深いことに、『自由からの逃走』のこの部分は、世論操作——それは、最終的には、精神なき商業主義と倫理的、政治的無関心に向かつていく——の全面的な診断を含んでいる。それは、批判理論に始まり、フロムの後の多くの著作の題材となった。とくにアドルノは、『人間の意識を形成する産業』でさまざまな鋭い調査をし、この現象に光を当てている。そして、ヘルベルト・マルクーゼのもつと論議を呼んだ『一次元的人間』(一九六四)は、いまなお、資本主義社会の集合的意識を厳密に調べる画期的な本となっている。

『自由からの逃走』の五章は、新しい社会的性格の心理的側面に当てられている。資本主義社会は、「人間の幸福と自己実現にたいして逆に作用している」ものとしてみられている。フロムは、カレン・

ホーナイには反対して、全体として、この社会の性格づけに「神経症的」という言葉を使うのを避けているが、一般に広まった社会的性格は、個人のなかに神経症的傾向をかなり強化しているというところは認めている。成功にむけての強力な圧力とそれと同じくらい圧倒されるような、確立されてはいるがしばしば不合理な社会的規範に順応させる圧力は、両方とも神経症的逃避メカニズムの形成に導く。その意味を真に理解することなしに一定の社会的性格に適応を強いられる個人は、ますます感情の安全弁の必要性を感じている。成長を押しえつけられた個性は、それゆえ、自動的に神経症的な逃避主義に引き込まれるだろう。

「権威主義」と「破壊性」、そして「自動的順応」の範疇のなかに、フロムは四つの基本的な型の神経症的逃避を描いている。そのメカニズムは、いったん始めれば、より大きな社会的性格に直接影響をあたえる自ら推進する力をもつだけでなく、悩んでいる個人自身をさらに不具者にもする。彼の精神病理学のなかで、フロムは、カレン・ホーナイがその著書『現代の神経症的人格』のなかで使った神経症的類型にはほとんど従っている。最初に描かれる神経症は、他人や権威にたいするマゾヒスティクな依存である。ホーナイは「神経症的な愛情の希求」という言葉を使っている。二番目の、同じように一般的な逃避メカニズムは、サディスティクな搾取と他人をおとしめようとするものである。それは、自分自身の力の感覚を再確認することを意味する。ホーナイの用語では、これは「力にたいする神経症的な衝動」と呼ばれている。第三に考えられる神経症は、破壊への逃避である。破壊的衝動が、個人内部の「生命愛的」な要因を抑え、それによつて、一定の社会に「死体的」な傾向がはびこる。「生命愛的」とおよび「死体的」という言葉は、『自由からの逃走』ではまだ使われていない。フロムはまだここでは、フロイト派の用語を忠実に使っている。にもかかわらず、彼のここでの破壊的議論は、はっきりと



「悪について」や『破壊』を予想させる。破壊性は「生を生きていない生の産物」である。ホーナイの「神経症の引きこもり」という範疇は、部分的にのみ破壊性の概念と相容れることができる。というのは、破壊性は、自己に課した、引きこもりの逆の形としてのみ表現されるからだ。四番目の、そして最後の神経症の逃避は、「自動的順応性」と呼ばれる。自動的な行動あるいは、別の言葉で言えば、社会的規範にたいする不用意な順応は、ホーナイの「神経症の従順」と密接に関係している。この特殊な神経症のタイプは、アメリカの資本主義にとくに特徴的である。それにたいして、より権威主義的なあるいは、攻撃的なメカニズムは、フアンズムの物興以前とその盛期に、ヨーロッパ一帯に広がっていた。だが、ホーナイとフロムの神経症にたいする記述がしばしば一致している、あるいはある程度まで入れ換え可能だとしても、こういった神経症の治療にたいする二人のアプローチは、根本的に異なっているということとは理解されなければならない。ホーナイは、彼女の著書『心の葛藤』(一九四五)のなかで、彼女自身の方法論にある洞察を示している。フロムの提案は、以下のように論じられよう。

この本の最後の部分で、フロムは、一九四〇年代初期のアメリカにおける社会的性格の鋭い分析と並行して、「ナチズムの心理」を究明している。「ナチズムの心理」を説明する手段として、フロムはしばしばアドルフ・ヒットラーの自伝『我が闘争』を引用する。それは、その著者の神経症的個性にかんしては、とてつもなく際立った記録である。権威主義的性格は、「サディステックでマゾヒスティックな衝動を同時にもち存在⁽²⁹⁾」と定義される。国家社会主義を支持した大衆心理は、かなり広範囲において、このような衝動の直接的な動きによっていた。ヨセフ・ゲッベルスは、ナチの宣伝相だが、多数の性格特性を操作するよう設計された複雑な機関のなかの異端分子と見られている。フロムは、ゲッベルス自身が民衆煽動の効果を身をもって体験し、それから、彼の自伝的な小説である『ミハエル』(一九三六)に

それを描いたのだと、機敏に観察している。ヒットラーの性格は、大惨事を招いた運動にたいする強い衝動をもっていたが、人類にたいしてはサディステックであり、運命や宿命を受け入れることについてはマゾヒステックだったと、正確に分析されている。フロムの「権威主義的性格」の描写は、まだ素描の段階にとどまってはいるが、ずっと後に『破壊』で深められることになる基本的考えの多くが、ここに極めて簡潔にみいだされる。明らかにフロムは、彼自身の観察にもとづく研究書(『ワイマール・ドイツの労働者階級』)にかなりたよっていたし、同様に、ハロルド・D・ラスウエルの国家社会主義のなか(30)に含まれる社会心理学的要素の示唆的ではあるが実験的な調査にもたよっていた。しかしフロムは、まだファシスト症候群に、十分確信にみちた、歴史的、社会・経済的説明をあたえるにはいたっていない。きわめて説得的なのが、最終章の「自由と民主主義」である。ここではフロムは、生活の完全な商業主義化によってもたらされる、人間の自我にたいする表立っていないが不穏な影響に目を向け、結果的には、当時のアメリカの社会的性格に目を向けている。激しい商業主義の命令が、日常生活のなかにいかに浸透しているかを一步一步分析していくなかで、フロムは、豊かで一見個人主義的な社会のなかに、個人の感情的な貧困を把握するようになる。個人主義という幻想は、マス・メディアにより拡大されているが、最終分析では、順応にたいする絶え間ない説得に過ぎないとされる。あらゆる商品は売りにだされ、その市場価値をもつ。すなわち、高く評価されるためには、社会的、また専門的技能が、正確な売価で「売られ」ねばならない。その結果、自覚性は押さえつけられ、「陽気さや、あらゆるものに微笑みを示す」といった基本的な情動が、まるで電気スイッチを入れたり切ったりするような自動的な反応となる⁽³¹⁾。本来の感情は、しばしばほとんど完全に抑圧される。現代の心理療法——ここでフロムは、正統フロイト学派の分析にあからさまな攻撃を加えている——は、大変しばしば、一般に広まって

いる社会的性格を補助する代理人になっている。神経症的強迫から個人を自由にするという本当の治療の機能を果たさないで、心理療法家と精神科医は、そのかわりに患者を社会規範に適應させることに全力をあげているようにみえる。結果的に彼らは、進行する神経症的ゆがみを効果的に治療するかわりに、初等教育段階でさえ、すでに計画的に独立した思考の息の根をとめている。独創的な思考は、本来の情動と同じように、急速に市場的な思考に置き換えられている。知的創造性にたいするこのような代用品は、多少とも関連のない「事実」の洪水のなかにもみられる。すなわち、「より多く事実を知ることによって、人は現実を知るようになる」という、あわれな迷信が広まっている。もしエーリッヒ・フロムが今、彼がこういっただけを書いた四十八年後、アメリカの公教育制度を評価する機会に恵まれたとしたら、確かに、彼は困惑して言葉もなかったらう。とりつかれたような事実の集積というつまらぬ事実さええとうの背に萎びてしまった。今日では、国民の希望は、喜々としてコンピュータに集中しており、この「魔法の助手」は、やがては学生や教師を考えるとこの苦痛にみちた仕事からまったく解放するだらう。

フロムによれば、事実と虚構、適切な情報と意図的な精神の墮落が、もはや切り離しては語られないところまで、自由が曲解されるようになった。この新しい、完全に商業化された自由の形を提示したのは、メディアである。ニュース・キャスターは、「ある都市に爆弾が落とされ、何百人もの人びとが死んだ」ことを、石鹸やワインの広告を伝えるのと同様のうつろな調子で報道する。こうして視聴者は、ますます彼の環境にたいする真の重要さと、それぞれの関連性の重みを見失っていく。政治的決定とか社会の発展といったもつとも重要なことは、消費主義という些細なことともはや見分けがつかなく

なってしまう。同時に、個人のウィジョンは、——外界の認識という意味だけでなく、内なるバランス感覚という意味でも——ますます断片的になっていく。「自由」の名のもとに、生活の全体構造が見失われている。生活は、多くの小さな断片から構成され、その断片は他の断片とは分離しており、全体としては、どんな意味をももちあわせていない。人間の願望は、人工的に刺激することもできれば、任意に抑圧することもできる。自然の創造性という真の起動力を欠いているので、独占資本主義のなかの個人は、ほとんど心のない、感情のない自動機械にすぎなくなる。それは教条化と順応主義という目に見えない糸によって操られる人形である。

フロムは、この診断をさらに一歩進める。個人は、自分自身だと自分で考える一体性を徐々に失っていき、最終的にはより強烈に順応の衝動に駆られる。社会的性格への過度の順応だけが、自信喪失に苦しんだり、さらには、罪の意識にさえ苦しむことを和らげる。そして完全な順応主義によってのみ、現代人は、集団から「異なっている」という烙印を押されずに済まされる。結論で、フロムは、「自由」とは、現代人にとって一体何を意味するのかという疑問を提起する。彼の答えはこうだ。人間は、かつては「自分の思い通りに行動したり考えたりする」ことをはばんでいた制限や足かせから何とか脱した。かなり早期の時代とその時代の人びとに課せられていた、人生の辛酸「からの自由」というかつては想像もできなかった状態が、達成された。新種の自由、人間性と調和した生活を創り出して暮らしていく「自由」で充たされるべき空間が生まれはしたが、この空間は、いまだ埋められてはいない。もし、自分の感情、思考、願望をしっかりと自覚していたならば、人類は、少なくとも理論的には、この新しい自由を享受できるはずだった。だがこうしてごく自然におこってくるはずの自覚が、「匿名の権威」に順応しなければならぬということに置き換えられた。本来の人間の自我は、出来合いの代替物によって駆



逐された。個人的な資質と認められるはずの力と創意は、消えうせた。その代わりに、無力感が支配する。こうした状況の具体的例を探そうとすれば、読者は、ある清涼飲料水の宣伝を思いおこせば十分だ。それは消費者の「自由」とは、あれかこれかどの飲み物を選ぶかの選択にすぎないことをほのめかしている。無力な大衆を意図的にだますことよって作り上げられる力の幻想を何よりもうまく描き出してくれている。そして逆に、無力感には、個人の順応したいという願いを強める。個人的性格および社会的性格は、相互に有害で神経症的な構えを補強しあう悪循環を形成している、と結論される。

人間の進歩は、『自由からの逃走』で詳細に描かれているように、明らかに行き詰まる。一見進歩とみえたことが、ゆっくりとした取り返しつかない、人間の解体の過程であることが明らかになってくる。一九四〇年代初期に支配的だった二つの社会・経済システム——権威主義的ファシスト国家と資本主義民主制——についてのフロムの要約は、陰惨である。それは、完全に希望をなくくような社会病理であり、そのなかでは進歩は不可能であるようにみえ、人間が自分の手で加えたジレンマから逃れられないようにみえる。診断そのものが、フロムの性格学のみで強調されている、ダイナミックな性格変化の、どんな予測をも妨げているようにみえる。というのは、ダイナミックな性格変化は、「より大きな政治的、社会的環境がそうした変化に好都合であるときにのみ、社会的変化をうながす」からだ。この本で分析されているように、権威主義的国家の社会的性格も、独占資本主義体制のそれも、「肯定的な」変化をおこしそうもない。

この問題にたいする解決法はあるだろうか？ すべての状況にかかわらず、フロムのこの問題にたいする最終的な答えは、あらゆる点でまだ説得力は弱い、肯定的である。失われた「する自由」は、「人間の自己実現によって」、つまり個々の個人がその本当の自己であろうと決心することによって、再

構築されねばならない。どうすれば、これは達成されるだろうか？ フロムは、内部からの蘇生を提唱し、第一段階として、個人の自発性の回復を掲げる。自発的行動と感情は、自由の主動因であり、人間の自我からは喪失しているが完全には失われてはいないと見られている。いったん自己自身と、そして他人とのあいだに自発的な関係が打ち立てられれば（それは、フロムの倫理的理論が詳細に述べられている『人間における自由』だけでなく、有名な本となった『愛すること』をも想起させる）、個人はもともと自然に第二の重要な領域と関係できるだろう。労働である。「創造としての」労働は、人間を疎外の束縛から解放するだろう。個人の性格におこるこのような変化——それは、やがて社会的性格をも変えてしまうだろう——は、同時により大きな社会—経済的变化をも伴うにちがいない。フロムは、強く計画経済を希求する。それは、操作や搾取といった不合理な原理にのっとった経済構造ではなく、公共の福祉を提供するよう注意深く設計されたものである。こうした目的が実現されるまでに、ひとつの大きな障害と取り組まねばならない。すなわち、「数の上では少数なのだが、彼らの決定に運命が左右される人たちに何の責任も負わずに、巨大な経済力をふるえる人たちのひそかな支配を取り除くこと」である。この二股の努力——すなわち、内からの進化と外からの社会的変化——によって、フロムは、人生の美と尊厳を取り戻し、「生きるという行為そのもの」のなかに真の意味を回復したいと願う。注意深い読者なら、最初にこの本を開いたときに、タルムードのモットーのなかに、このような意識の革命を暗示していたものがあつたことに気づくだろう。すなわち、「もし私が私自身のために存在しないなら、だれが私のために存在するだろうか？」である。この一行のなかに圧縮されたものは、フロム自身の理想でもある。すなわち、人間の自己の探究と充足を求めての人生を実現するよう、人間の本来の可能性にたいして永遠の希望をいやくことである。だが、こういった崇高な目的に到達できるのかどうか、で

きるとすれば、どうやって到達できるのか？ という問題は残る。

一九四一年においてさえ、このような提案の完全な非現実性は、多くの読者にとって明らかだったにちがいない。フロムは、労働の疎外と労働力の搾取のうえに強く根づいた社会秩序の内部で、個人的および集合的意識の自発的な変化をおこすよう主張する。もし現代資本主義が、物の大量生産（製造過程における疎外の主な力）をやめ、労働と資本の無条件な分離（利益配分などの手段による）をやめることができれば、それは、資本主義でなくなってしまう、異なった社会・経済構造が現れるだろう。明らかに、現状をこのように変革することは、大変動なしには不可能だろう。さらにフロムは、個人的および社会的性格の組織的な操作を正確に描写しているにもかかわらず、その全体性をまったく低く評価している。ある個人や集団が、実際に、このような意識の変革にすすんで参加しているという事実があったとしても、さらに言えば、前述のような自然な人間性をいくらかいまだ保っている個人が存在するとしても、それはなお少数にすぎない。彼らの生活形態は、必然的に支配的な社会的性格と衝突せざるをえないだろう。個人が環境に全面的に逆らっているばあいは常に、緊張が生ずる。こうした葛藤は、通常——フロム自身もよく知っていたように——神経症や、個人あるいはそれに関係している集団の孤立化、あるいは、もっとありそうなのが、完全なあるいは部分的な忍従であり、それにより外部の規範への順応という結果を生む。一九六〇年代から七〇年代にかけて、合衆国で学生運動や平和運動が、急速におこり、そして衰退していったことは、このような仮説の際立った証明である。概して、フロムの独占資本主義にたいする根源的で鋭い批判は、現実的解決をもたらしさない。そのかわりに、それは救済というほとんど神秘的なヴィジョンに訴える。フロムが描いているような、ぬかるみから独力で抜け出そうともがいている資本主義のイメージは、興味はそそられるが、説得力はない。

フロムの最初にしてもっとも議論の多い本のひとつである『自由からの逃走』は、喝采ときびしい批判の両方に迎えられた。高く称賛する批評のなかで、フロムの友人であるE・シャハテルはこういう結論にたつする。「現代人に働いているこうした力〔すなわち、自由に向けての闘争〕の特別な役割を明らかにすることで……、フロムは、現代人の社会的、個人的心理学にきわめて顕著で挑戦的な貢献をした。」⁽³⁶⁾ シャハテルの批評が、『社会研究誌』に載った事実から判断すると、その雑誌の編集者としてのホルタハイマーも、研究所の仕事にたいするこの本の重要性を感じていたに違いないと結論してよからう。その他の反応は、とくに新教徒の方面からは、好意的ではなかった。J・スタンレー・グレンは、フロムにたいしてもっともすげえ言ひ批評家のひとりだが、フロムの自己実現の教義を、束縛からのがれようとするもっともらしい方法として退ける。すなわち「この本は、人間の苦境をあまりに安っぽく見積もりすぎており、普通の人間への関心のなかに、個性は見失われている。」⁽³⁷⁾ 同様に、ジョン・H・シャルルはフロムによって提出されている人間主義的な自己解放が、最終的には人間を「さらに深い奴隷状態、つまり、社会への隷属に」⁽³⁸⁾ 導くのではないかという恐れを表明している。保守的な批評家として、「社会的」ということは、常に社会主義に傾く進歩的経済システムを意味する。要するに、現状の変化は、そういう学派にとっては呪うべきものなのだ。専門の精神分析医のあいだでは、その本の評判は、少なくとも初期の段階では、実際のところ、異口同音に否定的だった。トーマス・ハーベイ・ギル、M・F・アシュレー・モンタギュー、パトリック・マラヒーなどの批評家たちは、フロムの非正統的な方法論を鋭く批判し、同時に革新的で、新フロイト派的、マルクス主義的なアプローチを非難した。今日、フロムを学ぼうとする者にとって、この要とも言うべき著作は今なお、彼の思想の——すべてとはいかないが——多くの要素を含んでおり、応用心理・社会学的な批評の分野への最初の刺激的な進

出となっている。個人的な性格特性と全体としての社会的性格のあいだのきわめて複雑な相互作用のきわだった洞察は、当時の既存の社会・経済機構の印象的な分析と結合している。多くの、結果として生じている困惑させられるような矛盾にもかかわらず、この本は、自由で自己を信頼している人間によって形成された高貴で、ユートピア的理想状態のヴィジョンの極みである。したがって、この本は、フロムのしばしば矛盾する思考——それが、彼の偉大さと彼の限界を証明しているのだが——の格好の例証となっている。

二十世紀における人間の状態のこの印象的で、基礎的な研究に始まって、それに続く全作品でフロムは、人間存在の三つのきわだった側面を深く追求し始める。それは、(a)人間の魂と潜在意識、(b)政治的、社会的な生活のさまざまな側面、そして、(c)生きることの実践、である。この(c)のグループの本は、もともと一般に受け入れられたものであり、人間の意識の形成に働く内的、外的要因を総合しようとしている。

多少単純化しすぎだが、エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』以来ずっとつづく主要な研究は、おおよっぱに言って上述の三つの範疇に分けてよからう。(出版年度は、この本の他の箇所でも出てくるが、わかりやすくするために、ここにも載せる。)

(a) 『人間における自由』(一九四七)、『精神分析と宗教』(一九五〇)、『夢の精神分析』(一九五一)、『フロイトの使命』(一九五九)、『神と精神分析』(一九六〇)、『マルクスの人間観』(一九六一)、『悪について』(一九六四)、『ユダヤ教の人間観』(一九六六)、『フロイトを越えて』(一九七六)

(b) 『正気の社会』(一九五五)、『人間の勝利を求めて』(一九六一)

(c) 『愛するということ』(一九五六)、『疑惑と行動』(一九六二)、『希望の革命』(一九六八)、『生きるということ』(一九七六)

こうした分類を越えて、『破壊』(一九七三)には、特別な位置があたえられる。この本は、特殊な性格特性にたいする、フロムのもっとも重要で、印象的な探究であることは疑いない。さらに、この本は、主題にたいする技術的で、圧倒的に「アカデミックな」アプローチで他の本をしのいでいる。

この三分類は、数十年にまたがるフロムの探究心がどの方向に強く向かっているかを示している。本の第一のグループは、人間の倫理のさまざまな側面や、人間の魂の心理学的、感情的仕組みや(フロムの観点からは)、それに密接に関係する宗教や神話や潜在意識の問題を探究している。晩年に出版された『フロイトを越えて』を実際的な目的のために、一時的に置いておくなら、フロムは彼の主要な探究心を真っ直ぐに追求するのに、ほとんど四〇年の期間を要している。すなわち、彼の早期の論文から始まって、最後のそしてもっとも心を傾けた著作『ユダヤ教の人間観』に至るまでの四〇年間だ。

二番目の、かなり小さな一群は、——それに関係する、いくつかの付け加えてよい論文や、短い寄稿などについては、後で触れよう——一九五〇年代から六〇年代にかけて、彼がアメリカの政治に直接かわっていたことを反映している。『希望の革命』は、ここではさらに実践的な方向性をもつ本のなかに入れられているが、一九六〇年代の後半の、ユージン・マッカーシーの大統領選挙戦におけるフロム自身の政治活動から直接もたらされた。(c)に挙げられている本は、最終的には、それぞれ、それ以前の理



論的著作の副産物として見ていいだろう。『愛すること』は、とくに『人間における自由』で探究された人間的倫理の実践的案内書になっている。『疑惑と行動』は、より個人的な基礎に立って、フロム自身がフロイトとマルクスから獲得したものを要約したものである。そして、『生きるということ』は、まったく異なった二つの生活様式を描いているが、それは、人間性格学に捧げられたフロムの全ての著作にその足跡をたどることができる。この本は性格分析、経済理論、倫理を総合しようとする議論の多い試みだが、それゆえに、この本はフロムの人間存在の全体性にたいするもっとも重要な叙述の一つと見なければならぬ。人生の実践的な側面に捧げられたフロムの本は、どれも、思想家としての彼の発展の決定的な時期に出されている。正直なところ、ここでした分類はいくぶん荒っぽい。だがそれにもかかわらず、それは読者にとって、つぎに続く全作品の議論のための基礎的な方向づけとして役立つだろう。

- (1) ジェイト(二章、注4) p. 114.
- (2) 二人の友情のものと詳しい説明にについては、Jack L. Rubins, Karen Horney—Gentle Rebel of Psychoanalysis (New York: Dial Press, 1978) の方々にも。
- (3) Abram Kardiner, *The Individual and His Society. The Psychoanalysis of Primitive Social Organization* (New York: Columbia University Press, 1939).
- (4) いくらかの背景がルビンス(注2)の一章に描かれている。
- (5) *Beyond the Chains of Illusion* (二章、注7参照) p. 10.
- (6) Franz Borkenau, *Der Übergang vom feudalen zum bürgerlichen Weltbild* (邦訳『封建的世界像から近代的世界像へ』) (Paris: Félix Alean, 1934)
- (7) *Escape from Freedom* (一章、注3) p. vi
- (8) 以下の論文はフロムが、三章のなかで論じている。
- (9) *Escape from Freedom* (一章、注3) p. 283.
- (10) Wilhelm Reich, *Massenpsychologie des Faschismus zur Sexualökonomie der politischen Reaktion und zur proletarischen Sexualpolitik* (邦訳『ファシズムの大衆心理』) (Copenhagen: Verlag für Sexualpolitik, 1933) p. 39. 邦訳『法西斯主義の性』『Zeitschrift für Sozialforschung』3 (1934) p. 106. また、ローレン・モンタナーによって論議された。英訳は一九四六年に出ている。
- (11) *Escape from Freedom* (一章、注3) p. 284
- (12) 同書 p. 290.
- (13) 同書 p. 289
- (14) 社会的性格と社会的な感情を分析した『フロム博士の『Zeitschrift für psychosomatische Medizin』(1972)』 p. 171—191. Uschi Essbach—Kreuzer の “Die Theorie des Sozialcharakters in der Arbeit von Erich Fromm,” 『精神』1972。
- (15) *Escape from Freedom* (一章、注3) p. 22
- (16) 同書 p. 42.
- (17) 同書 p. 54.
- (18) 邦訳Richard Henry Tawney の *Religion and the Rise of Capitalism* (邦訳『宗教と資本主義の興隆』) (New York: Harcourt, Brace & Co., 1926) 参照してください。
- (19) *Escape from Freedom* (一章、注3) p. 62
- (20) Max Weber, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism* (邦訳『プロテスタントイデオロギイの倫理』) (資本主義の精神) (New York: Charles Scribner's Sons, 1930)



- (21) "Selfishness and Self-love," *Psychiatry* 2 (1939) p. 507-523.
- (22) Harry Stack Sullivan, *Conceptions of Modern Psychiatry*, William Alanson White Memorial Lectures, vol 1 (Washington: William Alanson White Institute, 1948)
- (23) *Escape from Freedom* (11章' 出の) p. 101.
- (24) 同書 p. 109 以下。
- (25) 同書 p. 128
- (26) 同書 p. 140.
- (27) Karen Horney, *The Neurotic Personality of Our Time* (邦訳『現代の神経症的人格』) (New York: W. W. Norton, 1945) を参照せられた。また同書者の *New Ways in Psychoanalysis* (邦訳『精神分析の新しい相』) (New York: W. W. Norton, 1939) を参照せられた。
- (28) Karen Horney, *Our inner Conflicts. A Constructive Theory of Neurosis* (邦訳『心の葛藤』) (New York W.W.Norton, 1945)
- (29) *Escape from Freedom* (11章' 出の) p. 221.
- (30) Harold D Lasswell, *Politics Who Gets What, When, How* (邦訳『政治—動機分析』) (New York. McGraw-Hill, 1936). を参照せられた。フクナヒルの本は' *Zeitschrift für Sozialforschung* 6 (1937) p. 220 以下にフロムと好意的に論議せられた。
- (31) *Escape from Freedom* (11章' 出の) p. 243.
- (32) 同書 p. 248
- (33) 同書 p. 251.
- (34) Erich Fromm, *Aggression und Charakter. Ein Gespräch mit Adelbert Reif* (Zurich: Die Arche, 1975), p. 20. 私の英語。

- (35) *Escape from Freedom* (11章' 出の) p. 273.
- (36) Ernest G. Schachtel, Review of *Escape from Freedom* in *Zeitschrift für Sozialforschung* 9 (1941) p. 491-495 の紹介は p. 495.
- (37) J. Stanley Glen, *Erich Fromm: A Protestant Critique* (Philadelphia: Westminster Press, 1965) p. 21
- (38) John H. Schaar, *Escape from Authority. The Perspectives of Erich Fromm* (New York: Basic Books, 1961) p. 295
- (39) *Psychiatry* 5 (1942) の p. 109-111 の Thomas Harvey Gill, 同書 p. 122-129 の M. F. Ashley Montagu, 同書 p. 118-122 の Patrick Mullahey の論議を参照せられた。また' 同書者の Anton T. Boisen (p. 113-117), Louis B. Hill (p. 117 以下) Ernest E. Hadely (pp. 131-134) と Louis Wirth (p. 129-131) の論議も参照せられた。

